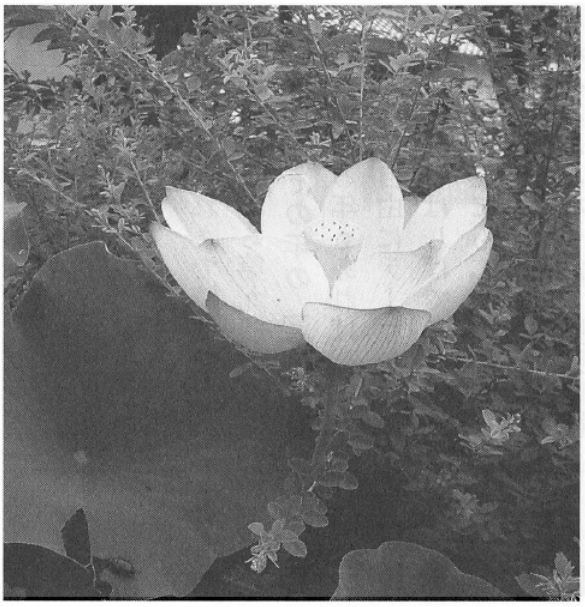
赤羽御坊

赤羽別院報 第11号

発行所：真宗大谷派
赤羽別院　親宣寺
発行人：野々山 洟美
愛知県幡豆郡一色町
赤羽上郷中14
Tel.Fax.(0563)72－2308
印　刷：㈱エムアイシーグループ

別院散策

別院を訪れる人々は、旧本堂の跡地をはじめ境内の周囲一帯に、四季折々の花が咲きそろっているのを眺めて、心の和む想いをなさることでしょう。



境内の草を取ったり、花壇に煉瓦やブロックなどで縁取りして土を入れ、仏花の真になる樹木を植え、枝を間引き、季節季節の草花を植え替えたりの作業は、すべて世話方さんのご奉仕です。本堂跡地には階段を取り付けていただき、上り下りも随分楽になりました。桜の季節には、町内のみなさんが紅白の幔幕を張り巡らし、花見の宴も開かれます。

写真の蓮は、飯田洋さん（赤羽）が根茎を入手し、丹誠して育てて下さったものです。阿弥陀さまの前にお供えすることもできました。

法要案内

報恩講

午前9時30分（15・16日）
午後1時30分（14・15・16日）

11月14日(月)　三浦　真教師
15日(火)　櫻部　建師
16日(水)　和田　法雄師

双全講（注）

午後1時30分

1月14日(土)　輪　番
15日(日)　和田　法雄師

春季彼岸会

午後1時30分

3月18日(土)　鈴木　見業師
19日(日)　鈴木　聡師
20日(月)　渡邊　賢雄師
21日(祝)　藤谷　信雄師
22日(水)　輪　番
23日(木)　伊奈　祐諦師
24日(金)　三浦　真教師

（注）双全講は別院を護持していくことと、法義を相続していくことの二つの目的を持って続けられているお講。

赤色赤光

人間は人とのかかわりの中で言葉をつかう▼「ありがとう」「おはようございます」など▼また、心の表現にも言葉をもって行う。「もったいない」「おかげさま」「ありがたい」「おとましい」他にも沢山ある▼「おとましい」は私が子供のころ、近くのおばあさんからよく聞いた言葉であるが、今ではほとんど聞くことはない▼「もったいない」「おかげさま」も近年の飽衣飽食を反映してか、あまり耳にしなくなり、世間から忘れ去られようとしている▼ノーベル平和賞を受けたケニアのマータイ環境副大臣が来日の際、日本語の「もったいない」に魅せられ、以後、世界の共通語にしようと呼びかけているという▼今を生きる我々は、身から出てくる「もったいない」「おかげさま」を次の世代に伝えたいものである。

（法輪　哲）

第九組のページ

人間が人間であるために

戦前よりこれまで続けて行われてきた伝統ある第九組の夏期講習会は、その年の「テーマ」を設けている年もあれば、その年の講師に自由にテーマを選んで頂く年もしばしばである。

本年は偶然にも二人の講師とも同じような「テーマ」を掲げられることとなった。慶應義塾大学非常勤講師の正木晃師が『親鸞聖人の生と死』、二日目の同朋大学大学院教授の田代俊孝師は『韋提希の生と死』と、いずれも「生死」というものを問題にされたのは印象深かった。

今年のように「生死」の問題をテーマに掲げて講演をされた例はまことに多い。そこで、私たちにとって、とても重要な「生死」の問題をどのように捉えたらよいかという視座で、過去の講演録を読み返してみた。

例えば、我々にとって「死」が「人生の究極のテーマ」であるにも関わらず、普段はまるで身近に感じられず、いざ現実問題となった時、それを引き受けられない存在であると、真宗学者雲井昭善師が見事に言い当てておられる。

昔はですね、皆「死」というものをズーと子どもでも、皆見つめてお年寄りの人を送ったんですけれども、今は気がついたら、もう死んで帰って来て、そしてダビに付すという事で、実際に感じ取る事が少のうなってきましたね。だんだん「死」というものを話をする事を嫌う。「エンギが悪い」ちってね。

一九九〇年夏期講習会『生・老・病・死』雲井昭善師より

また、同じく真宗学者の早島鏡正師は、日本人にとって決して忘れられない戦争中のことに触れられ、当時の青年として、懸命に死に真向かいになろうとした思いを語ってみえました。

昭和の十八年から二十年にかけて、もう日本はとうてい勝てない、では、どういう負け方をするかという前に、自分は自分で納得できる死というものをどういうふうに持つことができるのか、悩んでおりました。

（中略）

私は当時の思いが脳裏からはなれません。

一九九四年夏期講習会『佛法には無我と仰せられ候』早島鏡正師より

一方、奥様をガンでなくされたという真宗学者宮城顗師は「ガンの告知」というご自身の体験を通して、一方的に患者の側の受け止めと捉えるのは間違いで、実は我々自身がそれを受け止められるかという大きな問題であることに気づかされたと指摘しておられる。

告知した方が良い悪いという中には、患者さんにとってどうだというだけでない、お前は本当に、生死をみつめられるのかと、（中略）何か自分の事は全然問わずに、患者さんにとって告知した方が良い悪いという、どうもそれは肝心の問題をおとしとるように、私は思われるんですが。

一九九五年夏期講習会『いのちはかりなし』宮城顗師より

そしてあらためて本年の講師田代俊孝師の

老・病・死の課題を持って仏法を聴聞してほしい

とおっしゃられた言葉を問い返さずにはいかなくなったのである。

（文責　大溪　昌寛）

第九組　行事紹介

御誕生会

日時　平成十八年四月十二日（水）

場所　祐正寺（西幡豆）

講師　山碕　秀健師

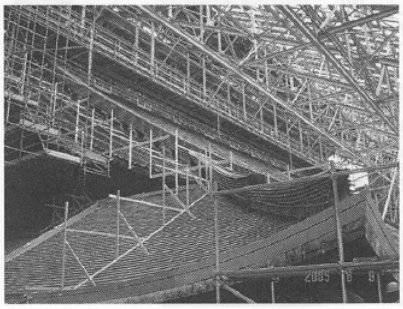
第十組のページ

本山瓦ものがたり
―明治時代の偉業―

(2)志貴野製瓦場の開場（その一）

二〇一一年厳修予定の宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌法要をお迎えするにあたり、二〇〇四年五月から御影堂仮設素屋根工事に着手し、同年十月には素屋根の構築が完了した。

更に、御影堂屋根の破損状況を細部に亘って調査が行われた。二〇〇五年二月九日、「真宗本廟御影堂御修復工事瓦降ろし始式兼素屋根工事竣工式」が執り行われた。



御影堂野地板の様子

以降、四月中旬ごろまでの凡そ八十日間が費やされて御影堂屋根の瓦が一枚ずつ丁寧に降ろされ、瓦を葺く時に使われた葺き土も丁寧に取り除かれた。

現在、屋根部分の老朽化した野地板から、約百二十年余りの間、雨や風から守り続けられてきた歴史が偲ばれる。

■製瓦場開場

明治十四年七月十六日、開導新聞によると「製瓦場の開業式を行うに付（中略）、同場の世話掛より製瓦人並に焼瓦工を二百人程諸方へ募るる」とある。

また、製瓦場記念碑の碑文には「用工十六万八一二五人、役夫十九万四三六〇人」と記されている。併せて延べ人数三十六万二四八五人となり、製瓦場が明治十四年七月に開場されてから明治二十年二月に閉場されるまでの凡そ二〇〇〇日間で計算すると、一日平均、一八一人の労働力が必要とされたことがわかる。

更に、用工を職人と考えると全体の四十六パーセントが職人であり、役夫は五十四パーセントを占めていたことがわかる。そしてこれらを日割りで換算すると、一日に約八三人の職人と約九八人の役夫が製瓦場の仕事に携わってきたことがわかる。

■岩瀬家と太子講

製瓦場の開場当初、本山再建作事部から、二百人の製瓦工、及び焼瓦工を募集していることに対して、職人の数が十分であったとは考えにくい。そこで、見落とせない事柄の一つに、太子講の存在がある。

一四六〇年志貴野町の対岸に位置する矢作川沿いの藤井村で三州瓦の祖といわれた岩瀬善四郎の家が早くから製瓦業を営んでいた。後に岩瀬家が中心となって岡崎から浅井をへて平坂、寺津までの矢作川沿いを代々、西三河東部地域の瓦師太子講の講元としてとりまとめ役をつとめた。

■太子講の役割

聖徳太子は日本仏教の祖であり、心の拠りどころであった。同時に大工、瓦師、左官などあらゆる職人の原点でもあった。この二つが交わって太子講がはじまったと思われる。そしてその役割は、職人の斡旋や瓦価格の協定、職人引き抜きの防止などであった。

また、組織の統制をはかるため、太子講に定められた規定を破ることがあれば、工具の取り上げや窯の取り壊しがあった。

■製瓦場と太子講

先に述べた太子講の存在が、明治に入ってからも機能していたことから、志貴野製瓦場と同じ村にあった瓦師太子講が職工の斡旋など、何らかの形で志貴野製瓦場を支えてきたと考えられる。

（文責　三村　謙作）

第十組の行事紹介

●本山報恩講団体参拝

日時　「十一月二十四日から二十五日まで」一泊二日

現地学習　北陸方面

（金津）吉崎東別院

（二俣）本泉寺

（藤島）超勝寺

第十三組のページ

門徒会座談レポート②

どの様にしたら多くの門徒さん達がお寺に足を運んでくれるか？

▼事前にどういう事をするのか、呼びかけをする時に話してくれるといいんじゃないかなあ？

▼そうだよね。こういう話しなら行きたかったのにという人もあると思うしね。

▼それと、せっかくやるんだからみんなの集まれる時間帯っていうのを考えてやった方がいいんじゃないかな。

▼あ～平日の昼間っていうのは来れる人も限られるしね。

▼来るにしてもね、今は車で移動する時代だから、まずどこに車をおいたらいいねとこうなってしまうよ。

▼でもね。車を止めるところがないからといってね、じゃあ人が来ないかというと、そうでもないんだよね。お稚児さんの時なんて、どこにこんなに子どもがおっただなぁと、思うくらいたくさんの子どもが参加して、それに伴ってその倍以上の大人が、ぞろぞろとついてくるんだから。

▼そうだよね。大きな行事でなくてもいいから、定期的に子ども達がお寺に集まれる様なことをしてもらえると良いんじゃないかなぁ。

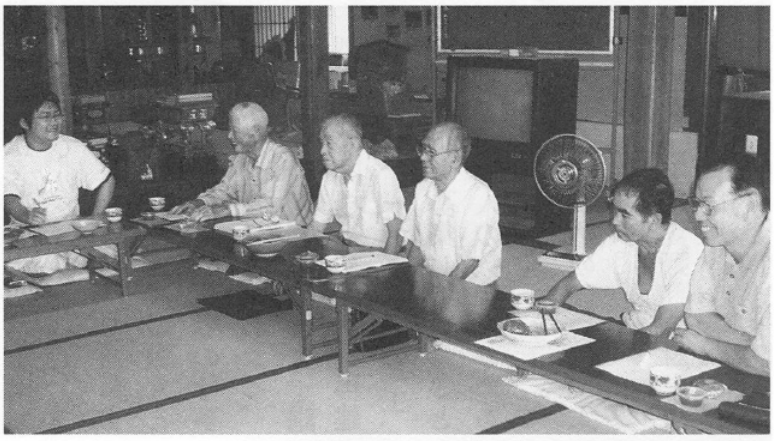
▼小さい頃にお寺に来たことあるって子と、全く来たことがないという子だと、全然お寺に対しての考え方が違うだろうしね。

▼それにはまずお寺が来やすい場所でないといけないでしょ。本当に子ども達に来てもらおうと思うなら、宗派とかを越えて近所中の子どもに案内を出さないといけないよね。

▼とは言うけど、一つのお寺の単位でね、そこまでやるっていうのはなかなか出来ないことだよ。昔からずっと続いてる所ならいいけど、今から始めようとするのはそりゃあ大変なことだよ。

▼そういうことに対して組織があるんだと思うよ。お寺だって組とか教務所とかあるんだから、そういう場所がいろいろサポートしていけるといいんじゃないかな。

▼お寺自身も、周りのお寺が子ども会を始め出したら、うちもやらなぁあかんかなというお寺も出てくるだろうしね。



▼そういった、相乗効果の和が広がっていくといいんだけどね。

■レポーターの感想

今回の座談会はすごく面白かったです。私自身が児童教化に関わっているというのもありますが、色々、考えているだけでなく、まず、寺院で子ども会を始めて行くことだと思います。この辺りには子どもが少ないから、と勝手に決めてしまうのではなく、校区の子ども会に働きかけてみたりしてみることが大切だと気付かされました。学校があるという事はそこには子どもが居るんだから。

（文責　伴　仁志）

第十三組　行事

赤羽別院報恩講お華束作り

第十三組の門徒会員で、別院の報恩講のお華束を作ります。

本山報恩講団体参拝

十一月二十四・二十五日

参加費　二万五千円

申込み、取次ぎは各寺院へ

第十四組のページ

シリーズ 親友（しんゆう）②

心の元気塾で出遇った仲間たち

永坂辰雄さん　鉄工（自営業）、五二歳。一九九五年に心の元気塾「推進員養成講座」に参加し、現在に至る。法名は、釋相望（しゃく　そうもう）

―この元気塾に最初に参加されたきっかけはというのは、お手次の光輪寺さんなんですか。

そうですね、たまたま住職から勧められて、もう一人の仲間とどうだという話がありましたもので。その頃に宗教だとか、そういうものに対して、どういうものなのかなという興味が少しありましてね。

それと、やっぱりお寺というのは、今の若い人でもそうだと思うんだけど、どうしてもまだ縁がないとか、そういうことで遠ざかっていたところがあったんだけどね。

でも、たまたま何も知らないとこでね、ともかく一回、参加してみようと。

―それまでは、お寺に足を運ぶということはなかったんですか。ちょくちょく行ってたんですか？

それまでは、全く行ってないですね。それで、お寺の住職、お寺自体に対してはどうも抵抗感があって。言い方悪いけど、他力で飯食っとるとか、そういうふうに自分自身、思ってましたもので。

左から3人目が永坂さん

それで、やっぱり、葬儀だとか、そういう時しか、お寺は必要ないと思ってましたね。

―やっぱり、スタートはそうでしょうね、多分。みんな同じようなものです。そこでもし住職さんが、永坂さんじゃない方を誘ってたら、ご縁がなかったというか。

そうですね、今の状況はなかったと思いますよね。それで、先程言ったことじゃないですけど、お寺というのは、別世界のことだと思ってたんですよ。今まで、住職さんだとかいうのは、家に葬儀ができて、そういうときしか話ができていなかったんですよね。

―そうですよね…。

だけど、心の元気塾に参加して、もう何年かになりますけど、十九ケ寺ある第十四組（碧南市内の真宗大谷派寺院の集まり）の、いろいろかの住職さんと、身近に話ができるというのは、やっぱりいいことだなあと思いますね。

自分の檀那寺だけだと、どうしても一つの見方しかできないけど、いろいろかの住職さんと会えば、やっぱりそれはまた、あっ、やっぱり、普通の人だなあ、と思うことがあるから、これは大事だなあと思ってね。

それと元気塾に参加して、いろいろな職業の人たちと話し合うと、世界が広がるというか、また、違うところが見えてくるかなあと思いまして。

それで皆さんと、こうやって元気塾で、いろいろかの話をしたり、まあ、会うことが楽しみですね。年々、そういう意味で、元気塾に出るのが楽しみになってきたかなあと、思いますね。

―たしかに自分もですけど、こういうところで出遇えて、こうやって話をするというのが、本当にすごい不思議なご縁だと思いますね。

（二〇〇五・七・二十三）

聞き取り＝山本・編集＝安藤

輪番室

去る七月末開催の教区会及び教区門徒会において、長年に亘って論議されてきました三河別院との二重崇敬について、八組から十四組（西尾市、幡豆郡、碧南市）までを赤羽別院の崇敬区域とするという形で一応の決着を見ました。もともと崇敬区域というのは、別院をいよいよ崇敬護持する目的で定められたことであろうと思われます。

今日、どう護持するかは容易に想像できますが、別院の崇敬についてが見えてきません。存在意義はよく論議されますし、運営やシステムの問題も何度も議論されています。しかし、どこか議論がかみ合いません。

私は近頃こんな風に思っています。如来さまを慕い、お念仏の教えにふれ、救いを求める者を、地域や寺檀を越えて容易に受けいれてくれる場が、別院でないかと。それに教法をもって応え、如何にしてお伝えするかの一点に、別院の存亡がかかっているように思います。

別院の動き

去る六月二十一日、第九組、第十二組そして第十三組の組長より、赤羽別院の今日的意義と機能さらにはシステム等々について根底から討議して、地域教化センターとしての再生を願いとする要望書が提出されました。「別院は目を覚まさなければなりません。別院の可能性を求めなければなりません。別院の責任を果たさなければなりません」という切迫した内容でした。かねてより別院としても、集中した討議を願っていたところでもあり、早速各組にご依頼し、赤羽別院再生委員会を立ち上げたところであります。教区の役職者や宗務役員にも委員を委嘱し、精力的に議論を重ね、半年間くらいで結論が導き出されることを願っています。

取りまとめの座長に、藤谷信雄氏（十二組了願寺住職）が互選されました。おおいに手腕が期待されます。

第一回　十月四日
第二回　十一月九日

赤羽別院経常部　2004年度歳入歳出決算書　2005年度予算書

（2005.4.1～3.31）

歳入額　9,609,676円
歳出額　7,990,645円
次年度繰越　1,619,031円　　予算総額　9,580,000円

歳入

項	目	2004年度決算額	2005年度予算額
1信施収入		4,047,033	4,050,000
	1読経志	761,500	650,000
	2志納金	2,454,820	2,500,000
	3賽銭	358,513	450,000
	4諸懇志	228,200	200,000
	5永代経志	200,000	200,000
	6会費収入	44,000	50,000
2墓地礼金		1,380,000	900,000
	1墓地使用礼金	1,000,000	500,000
	2墓地管理礼金	380,000	400,000
3回付受金		2,206,400	2,200,000
	1積立金会計回付受金	2,000,000	2,000,000
	2教区回付受金	206,400	200,000
4雑収入		680,629	810,969
	1雑収入	680,629	810,969
5繰越金		1,295,614	1,619,031
	1繰越金	1,295,614	1,619,031
合　計		9,609,676	9,580,000

歳出

項	目	2004年度決算額	2005年度予算額
1式務費		3,243,900	3,300,000
	1荘厳費	300,191	250,000
	2法要費	2,438,338	2,500,000
	3諸法要費	505,371	550,000
2教化費		435,163	800,000
	1教化費	392,581	400,000
	2文書伝道費	42,582	400,000
3運営費		3,653,511	4,080,000
	1会議費	77,883	100,000
	2給与費	2,725,600	2,800,000
	3備品費	0	300,000
	4負担費	99,100	100,000
	5慶弔費	40,000	50,000
	6諸　費	710,928	700,000
	7旅　費	0	30,000
4管理費		658,071	1,030,000
	1営繕費	182,000	500,000
	2防災費	328,619	330,000
	3管理諸費	147,452	200,000
5積立金		0	0
	1積立金	0	0
6予備費		0	370,000
	1予備費	0	370,000
合　計		7,990,645	9,580,000

「赤羽御坊」協賛者芳名

（前号披露分以降の協賛者）

西尾市唯法寺▼吉良町正向寺（2回）▼西尾市了願寺（2回）▼西尾市上矢田町浄徳寺▼西尾市聖運寺

編集後記

紙面の都合でQ&Aは次号にまわしました。悪しからず▼別院の予算決算を掲載しました。積立金を取崩しての運営、対策が急務。